一物しる人のおのづから風流なる詞いふはめでたし、なまじひにまねびいふは拙し、時めく人をねたみて其あしき事のみあげ、富る家をうらやみて其寶をかぞへ、あるはへつらへる、あるはほこれる、又價尊きものを賤しく得つといひ、賤しきものを貴くもとめしと語る、いづれもあし、一書畫調度ふりたるを慕ふとも、いたく耽り翫ばゞ、志を喪ふ事に至りなん、飲食瓶花も時ならざるをめづる事なかれ、異ざまなるを好む事なかれ、調度もまたしかなり、何事も僞りかざらぬさまこそよけれ、

一おのづから風流なるこそ眞の風流とすべし、つとめて風雅ならんとするは、なか〳〵に山の井の淺き心みらるゝわざなるべし、

こはおのれ松の嵐をきゝ、軒端の月にうそぶき、碧眼をこゝろむるとて、何となく心に浮び思ひ出らるゝまゝを、みづからしるし、自ら警むるになん、

〔雲萍雜志一〕江戸葛飾のほとりに、權兵衞といへる村長あり、ある年の春、伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人とともに御師何某が家に宿るに、山海の珍味を盡し、馳走ありて後、おのおのに薄茶まゐらせんとて、案内して茶室へ招請しければ、かの村長を始として、十三人席につけば、御師は丁寧にあいさつして、心を配り茶を建て、權兵衞が前に出しおきけれども、農夫の身なれば、茶道の心得はいさゝかもなければ、大に心をくるしめ、場うてして思ひけるは、いかにして飲べきや、人の咄にも、茶は飲たる上にて順にまはすなどゝ聞しが、十三人へ一杯ばかりの茶を飲かけ、まはしたりとも足るべからず、又ひとりして飲み、他のものへ鼻あかせんこと、いかがなれども、われ村長の身として、今更聞て飲まんも口をしきことなりと、さま〳〵心のうちに思ひめぐらすうちに、御師は先に出せし口取菓子を村長が前へさし出し、いざ召れ給へと云ゐければ、はつと茶を取あげて殘らず飲み、前におきければ、御師は取て茶椀をそゝぎ、又建て村長